



小池 光選

どの部屋も番号のみが記されて培養室のごときマンション

【評】いまのマンションやアパートはこういうあんばいになって住人は表札を出さない。隣に誰が住んでいるかわからない。防犯上の対策なのだが、まさに培養室。異様だ。

夕方にラジオの前で正座して「鐘の鳴る丘」聴いた八歳

【評】昭和二十二年に始まったNHKのラジオドラマ。少年時代、毎日聴くのが楽しかった。ラジオの前に正座する、というところに少年の気持ちが正直に出ている。

バス賃の十円玉を握りしめバスには乗らずアイスを買った

【評】アイスを賞め賞め、真夏の道を歩いたのだらう。その道は遠かった。でもあのアイスの味は忘れられぬ。バス料金十円の時代。盆参りの隣の墓に老婦人。墓碑には「ビルマ戦死 二十歳」と

我が島に鉄路はないが世界へとつながる海路眼前にあり

ピストルを持つとスマホ忍ばせて七人の敵まつ街に出て行く

額に入れ居間に飾れば孫の絵がピカソに見えてお茶が美味しい

「ちやあまた」と振り向きもせず手をあげて去り行く友に「ちやあ」と声投ぐ

起床時の指関節のこわばりをほぐすことから一日始まる

味噌汁のひとつの玉子に黄身ふたつ仕合はせ感ず朝のひとつとき

城陽市 相原 洋次

栗木 京子選

脇笠雨友の悩みに重なりて激しく降って地を固めてる

【評】脇笠雨は突然に降ってくる雨のこと。友の身の上にも急に苦難が降りかかったのだらうか。ともに心を痛めているが、結句の前向きな表現からは励ましの声が聞こえる。

子供らの幼き頃の夢をみてつたなき母の私もありぬ

【評】夢の中に幼かった日々の子供たちがいる。その横には若い母親としての作者の存在もあるのだ。慣れない育児に奮闘していた自分が愛しくなる。「つたなき」が印象深い。

ならまちの石の仏の頭のうえにリボンするがに揚羽の一つ

【評】ならまちは奈良市の中心部にあつて歴史的文化が残るエリア。石の仏も蝶も独特の情感をもつ。リボンの比喩が楽しい。

ホーキング博士の隣り師も居ませ曇天あつき夏の星々

「識字率」高いが低い「識詩率」どこをさまよう古典の名詩

妻と愛犬と過す夏休み社会学の師の教え「社会は三人から」を思う

捕まえしイナゴの口より零れ落ちる緑の汁は新米の香か

三度目のこんぴらさんは子や孫と登る八十六歳の夏

スマホ置きホームステイに発ちし孫よユミカ高し肝が据わりて

すじ雲に乗って猛暑は過ぎ行くも身体動かさず立ちゆかぬ朝

栗木 京子 新

俵 万智選

吹かれない父のホルンは冷たくてただ運ばれてゆく春の風

【評】何らかの事情で吹かなくなつたホルン。遺品だらうか。冷たいのも運ばれてゆくのもホルンなのだが、どこか父そのもののように感じられる。その重ね合わせが見事だ。下の句の句またりが切なさを強く響かせる。

まだついてない嘘は嘘のたまご 胸の中のぶちぶちをつぶす

【評】この卵が孵つたら、嘘が生まれてしまふ。一つ一つ確認するような下の句が面白い。ニワトリの卵ではなく魚卵のイメージだ。

ガス灯や帰る場所などなかつたら迷子にならずに済んだでしょうか

【評】なまじ目的地があるから迷子になるのではという問いかけに、ハッとさせられる。物語めく舞台装置としてのガス灯が効いている。

吾が前に蜂あらはれてバラの葉の切符に丸くハサミを入れる

蓋を開けカッパ麵からたちのぼる虹の根元を箸でつまんだ

わが影をまへに立たせて歩きゆくもちろん影は汗をかかない

錯覚で下りに見えた坂道を今度は上る君の転職を覚えた

思い出のいやなことは鮮やかでまち針つけたままのスカート

一円はお金の赤ちゃんそう呼んだ孫と見つめる輝くアルミ

弁当にお茶を並べていくように言葉を選んで葉書に詰める

俵 万智 新

黒瀬 珂瀾選

「負けました皆な応援ありがと」家族LINEへ少女剣士が

【評】負けても爽やかな感謝を告げる少女。その言葉が家族のLINEに流れるのが、時代性ですね。試合後にスマホを手にして直ぐに感謝を伝えたかった、という気持ちです。不条理に死すことありとガリ刷りの同人誌に書きし吾は古希を過ぐ

【評】詩歌の同人誌でしょうか。一書き二書き力を込めてガリ版に刻んだこのメッセージ、まさに若さゆえのニヒルな感情ですね。七十歳の自分なんて想像できなかった頃の……。

耳澄まし父と思ひし靴音は夏の果てへと遠ざかりゆく

【評】ふいに父の靴音を聞いた気がした。はつと思ひ、見渡しても父はいない。もしかして父はあの戦争の夏の死者でしょうか。

兵役の子に煙草をと配給所に夜明け前から祖母は並びき

日本人ファーストを叫ぶその影に介護に励む外国人の夏

やがて土に紛れゆくべし病葉の裏にすがれる蟬のぬけがら

この町のたましいの入れものとして漂うレジ袋を見たかい

男でも泡となり消えただらうか夜道で思ふ人魚の性差

ノート手にスマホの指導受けるわれ小四講師の得意げな顔

週一度四十首もの短歌読みて四十人の生きざまに会う

黒瀬 珂瀾 新